

きよみず
「清水購入した」という表現

—使用基盤モデルから見た意味の伝染と語形成—

氏家啓吾

keigo5525@gmail.com

要旨

本発表は「高価なアクセサリーを清水購入した」「そのコメント重箱すぎじゃない?」といった、特定のイディオムを念頭に置かなければ理解できないような表現について使用基盤モデルの立場から考察するものである。イディオム全体の意味が部分に移る現象と捉えて「意味の伝染」と呼ばれることがあるが、言語使用者の伝達行為に着目することでより深い説明が可能になる。このような発話は、手がかりとして記号を提示することによって解釈上の鍵となる別の記号を喚起する伝達行為として特徴づけられる。成立条件として (i) 鍵となる記号の慣習性、(ii) 記号間の結びつき、(iii) コンテキストの支えが必要とされる。typo をもとにして clicko を作るような特定の語をモデルとした語形成も同様の原理で説明できる。使用基盤モデルの見方では、標準的な言語使用とこうした臨時的伝染、および新規の比喩の間の関係は、発話のカテゴリー化に利用される記号ユニットの用いられ方の違いとして説明される。

1. はじめに

思い切って高価な物を買うことを「清水購入」と言うとき、その背後に「清水の舞台から飛び降りる」という句がある。本発表ではこのような明示されていない特定の表現を知らなければ解釈できないような言葉の使用について論じる。このような現象は意味変化の観点から「意味の伝染」と呼ばれることもある。しかし、本発表ではこれを伝達行為における記号の利用の仕方に着目して分析することを提案する。記号を手がかりとして提示することによって明示されていない記号を喚起する行為としてこの現象を特徴づけることで、イディオムの改変やある種の新語形成との共通性が明らかになる。さらに、使用基盤モデルの立場を取れば、発話を既存の記号によってカテゴリー化するという言語使用において常に生じているプロセスの特別な場合としてこの種の現象を捉えることができる。

構成は次の通りである。2節で問題の事例と先行研究での扱いを見て、3節で現象に対する本発表の特徴づけを提示する。4節と5節では、それぞれイディオムを改変する表現と特定の語をモデルとした語形成に同じ分析が適用可能であることを示す。6節では使用基盤モデルの立場に立ってカテゴリー化の観点から現象を整理する。7節は全体のまとめである。

2. 意味の伝染

次の例は小説からの例で、ある店に「ママ」の集めた偽物のシャネル製品が多数置かれているという描写に続く文である。

- (1) ママが毎日必ずつけるバレッタとイヤリングだけは数少ない本物で、店を始めるときの験か
つぎに清水購入したものらしい。 (川上未映子『夏物語』; 傍点は原文)

「清水購入」とは「清水の舞台から飛び降りる」というイディオムを踏まえたもので、自分にとって高価なものを思い切って購入するということであろう。注目すべきは、ここで「清水」という要素がイディオムの全体の意味を担っているという点である。また類例として、ささいな点を取り上げて難癖を付けるようなコメントに対して、次のように言うことが可能と思われる。

(2) そのコメントはちょっと重箱すぎじゃない？

「重箱の隅をつつく」に基づいた表現である。ここでも「重箱」という要素がイディオム全体の意味を担っている。

定型表現の特定の一部分がその表現全体の意味を担う現象は、語の意味変化の研究において意味の伝染 (contagion) と呼ばれてきた (Bréal 1897: 221, Ullman 1959: 244)。全体の意味が部分に移ったと捉えられるからである。池上 (1987) は、意味変化の原因となる語同士の関連性を語義の近接性・語義の類似性・語形の近接性・語形の類似性の4つに分類した上で、語形の近接性による意味変化として伝染を紹介している。英語の daily という語が daily newspaper (日刊紙) に相当する意味を持つことや、「おおきに」が、(おおきな) 感謝を示す言葉として使われることなどを例として挙げた上で、「…よく結合して用いられる言い方があり、次にその一部が省略され、その部分によって担われていた意味は残った部分に移されるという形で変化が起こる」と説明する (池上 1978: 149)。(1) の例も「清水の舞台から飛び降りる」の全体の意味が「清水」の部分に移るという変化が臨時的に起こったのだと考えることも可能である。

3. 伝達行為として見る

だが、「意味が移る」という捉え方は適切だろうか。たしかに、daily などの語の新たな用法が確立した時点から眺めると全体の意味が部分に移ったと記述することも可能である。しかし、(1) や (2) の例が実際に使用される現場に着目すると、これとは違った見方ができる。

(1) や (2) のような言語使用の一番の特徴は、伝達行為における言語記号の利用の仕方にある。これらの文には解釈に必要な記号が完全に明示されていないため、聞き手は、明示された記号（「清水」）を手がかりとして、明示されていない別の記号（[清水の舞台から飛び降りる]）にアクセスし、それと関連づけて発話を解釈する必要がある。手がかりとなる記号の提示によって、解釈の鍵となる別の記号を喚起する。そのような、言語記号のいわば「飛び道具的」使用こそがこの臨時的伝染現象の重要な特徴である。

以上を踏まえると、この現象が成り立つためにはいくつかの条件が必要であることが予想される。まず、(i) 解釈の鍵となる記号が共同体の中で皆が知っている表現として共有されている、つまり慣習的ユニット (conventional unit) となっている必要がある。もし聞き手がもとの [清水の舞台から飛び降りる] を知らなければ解釈は成功しない。次に、(ii) 提示される記号と鍵となる記号の間に、前者によって後者を想起させることが可能になるような結びつきがなければならない。

「清水」はイディオムの構成要素の1つとなっている。何の関連もなければ、当然ながら手がかりとしての役割を果たしようがない。そして、(iii) 鍵となる記号にアクセスしやすくするようなコンテキストの支えが必要である。(1) の例では高価なものを買うことが話題になっていることがわかるため当該イディオムにアクセスしやすくなっている。前置きなく「清水だね」などと言ったとしたら、[清水の舞台から飛び降りる] の意味を伝えることは困難である。

このように使用場面に着目すると、この現象は「意味が移る」というよりは、「小さな記号を提示して大きな記号を喚起する」という伝達行為であることがわかる。この使用が繰り返されて定着・慣習化すると、イディオム全体の意味が提示記号の慣習的意味の一部になり、結果的に全体の意味が部分に移ったと捉えられることになる。意味の伝染という用語は、上述の行為が繰り返されて慣習化する過程のはじめと終わりを比較して初めて成り立つ比喩なのである。

4. イディオムの改変

以上のような見方を取ると、思いがけず急に残業しなければならなくなることを「寝耳に残業」と言ったり、やっかいな相手が不在の際においしいビールを飲むことを「鬼の居ぬ間にプレモル」と言ったりするようなイディオムの創造的な改変も、上述の臨時的伝染現象と同じ仕組みによって捉えられる。もととなる〔寝耳に水〕〔鬼の居ぬ間に洗濯〕という表現が部分的にしか示されていないが、発話の解釈に必要な鍵として働いている。

この種の現象の先行研究を見よう。英語に関して、Barlow (2000) は、イディオムがさまざまな程度に改変されて使われることを指摘している。make hay while the sun shines. 「やれるうちにやっておく(日が照っているうちに干し草を作れ)」ということわざが、例えば次のように while 節の内容を置き換えて用いられることがよくあるという (Taylor 2012 も参照のこと)。

(3) While Mr Soros apologises, the ladies of Beardstown are making hay.

ソロス氏が謝罪している好機にビアーズタウン女性投資クラブはつけ込んでいる。

(*The Times and Sunday Times*; Barlow 2000: 337)

日本語については、鈴木 (2018) が慣用句の形容詞部分をその反義関係にある形容詞に置き換える創造的な表現がコーパス上で多く観察されることを示している。次のようなインターネット上でのやりとりの例が挙げられている。この会話ではペットの犬に着せる服を作るための採寸が話題になっている。

(4) A: 今年こそ、重い腰あげて採寸しようかな

B: いやいや、腰が軽い時で (笑)

(鈴木 2018: 109)

「重い腰を上げる」というイディオムを踏まえて「腰が軽い」という表現を構築している。合成的には成り立たないが、対比を考慮すれば意図した意味が理解できる。先行する A の発話の「重い腰あげて」に続いて提示されているためイディオムへの到達がぐっと容易になっていることに注目されたい。このように対比のコンテクストによるプライミングが創造的な表現を促進することは、語形成の研究でも確かめられている (Bauer et al. 2013: 524, 野中・萩澤 2019: 147)。

いずれの例も、明示されない記号を喚起することで成り立っており、前節で述べた 3 つの成立条件、すなわち (i) 解釈の鍵となる記号の慣習性、(ii) 提示記号と鍵となる記号の結びつき、(iii) コンテクストの支えがそれを可能にしていることが見て取れるだろう。では、これらと前節の「清水」の例との違いはどこにあるのだろうか。それは、条件 (ii) の記号間の結びつきの内実にある。前者では、複合的表現〔清水の舞台から飛び降りる〕から一要素を取り出したものが提示記号として用いられている。それに対して後者では、複合的表現〔寝耳に水〕の一要素を別の記号に置き換えたものが提示記号となっている。

表 1 提示される記号と鍵となる記号の関係

提示される記号	解釈の鍵となる記号	関係
「清水」	[清水の舞台から飛び降りる]	取り出し
「寝耳に残業」	[寝耳に水]	置き換え

取り出し型の場合には、提示される記号はもともと一つの記号であるため、もとの意味と臨時的に生じた意味との間にずれが生じる。そのため、新たな意味が慣習化すれば「語の意味変化」として捉えることも可能となる。上述の池上の引用のように意味が部分に移る変化として分析される余地が生じるのである。他方、置き換え型は、意味変化というより構文スキーマの発生を帰結する。もとの[寝耳に水]と新たな記号[寝耳に残業]の間に共通点[寝耳にN]が見出され、さらなる事例を生み出す可能性があるためである。

5. 特定の語をモデルとした語形成

以上の考え方は語形成の領域にも適用できる。英語で、clicko (クリックのミス) や scanno (スキャン時のミス) といった語が使われることがある。これらは typo (タイピングのミス) に基づいて作られたものである (Bauer et al. 2013: 527, 萩澤 2019)。

萩澤によれば、この -o はいまだ形態素として十分に確立しているとはいいがたいという。つまりこれらの語は単に [V-o] という構文スキーマの適用による造語ではなく、モデル語の typo に依存して造られているということである。そのため、第一に、作られた語が typo と意味面・音韻面で類似していなければならない。意味的には「デジタル機器使用時の言語産出ミス」という意味を典型としたプロトタイプ構造が見られ、音韻面では語基がほぼ単音節の語に限られるという (萩澤 2019: 43-45)。そして第二に、談話の中での typo との対比やミスを想起させる話題など、コンテキストによる支えが必要であるという (萩澤 2019: 47)。

新規の記号によって明示されていない [typo] という語を喚起する行為として、前節までで論じてきた臨時的伝染とまったく同じように分析できる。モデルとなる [typo] の中の動詞 type の部分を他の動詞に置き換えているので、置き換え型の事例であると言える。先行研究で指摘されていた意味的・音韻的類似性およびコンテキストの条件も、前述した臨時的伝染の条件に一致している。たとえば単音節語しか語基として使われないという制限は、提示記号とモデル語 typo の間の結びつきを担保するためと捉えられる。同種の語形成は、highjacking をもとに作られた carjacking (車の強奪) や、literati (文系知識人) をもとに作られた twitterati (影響力のあるツイッターユーザー) など、ブレンディングによる造語にも広くみられる。Kemmer (2003: 74) は置き換え型ブレンド (substitution blends) と呼んでいる (Booij 2010, Callies 2016, も参照)。

6. カテゴリー化の観点から

6.1 使用基盤モデルの想定する発話のカテゴリー化過程

ここまで論じてきた現象は、カテゴリー化の観点から整理することができる。私たちは常に、カテゴリー化の働きを通して経験を組織化している。カテゴリー化とは、対象を「～とみなす」ということである。たとえばテレビ番組に出てきた人物を見てタモリだと認識するとき、見る人

は自分の知っている [タモリ] という知識項目によって対象をカテゴリー化している。

Langacker による認知文法の使用基盤モデル (Langacker 2000, 2008) では、言語の知識は言語使用から抽出されたさまざまな抽象度のユニット¹の構成する、語彙-文法の連続体を包摂したネットワークであると捉えられる。そして、言語使用の場面においては、このユニットによる発話のカテゴリー化の働きが決定的に重要な役割を果たす (Langacker 2008: 228-230; 氏家 2019 も参照)。通常意識されないが、言語の使用は常に既知の言語記号によるカテゴリー化によって成り立っている。特定の音の連なりが個別言語の表現とみなされるのは、言語使用者がそれを特定言語の記号ユニットによってカテゴリー化するからにほかならない。

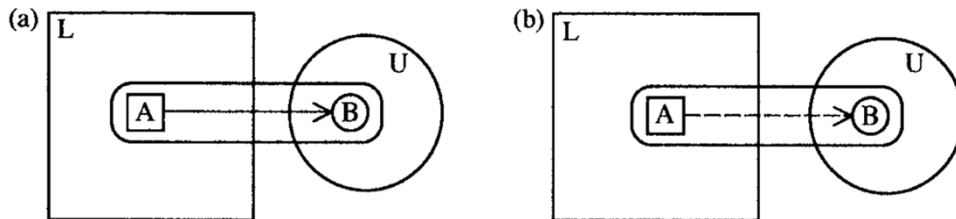


図1 使用事象のカテゴリー化 (Langacker 2008: 223) 使用事象 U の特定の部分 B を言語 L の中のユニット A の事例としてカテゴリー化する。カテゴリー化関係が矢印で表されている。(a) は不一致がない場合、(b) は不一致がある場合。

日本語の具体例を考えよう。「ぶどう食べたい」という発話がなされたとする。聞き手は、この発話の各部分を自らの知識のネットワークを構成する日本語の記号ユニットによってカテゴリー化することを通して発話を理解する必要がある。たとえば、「ぶどう」の部分を知既の記号ユニット [ぶどう] によってカテゴリー化し、それを [...食べたい] という構文スキーマと組み合わせることで、発話全体を (あるレベルでは) 理解することができるだろう。このようにして理解がなされるとき、カテゴリー化に使われた一連のユニット ([ぶどう] と [...食べたい]) は「カテゴリー化ユニット」(categorizing units) と呼ばれる。発話のインプットに反応して一時的に活性化されるユニットは多数あり (たとえば [ぶどう] 以外に [武道館] などが活性化されるかもしれない)、そのうち実際にカテゴリー化ユニットとなるのはごく一部であるため、活性化されたユニットはカテゴリー化をめぐる互いに競合する。この競合の結果を決定する要因は、(i) ユニットの定着度、(ii) ユニットとカテゴリー化対象の一致度、(iii) コンテキストの影響の 3 つがあるとされる (Langacker 2008: 230)。

6.2 カテゴリー化関係による整理

このような見方に立つと、本発表で見てきた臨時的な伝染現象は、通常の言語使用のあり方から大きく逸脱したものではないことがわかってくる。発話という手がかりを提示することで解釈に必要なユニット (=カテゴリー化ユニット) を喚起するという点ではまったく変わるところが

¹ ユニットとは、構造が定着 (entrench) したものである。たとえば「あたたかみ」という語にはじめて出会った時にはそれを形容詞 [あたたかい] と構文スキーマ [A-み] との組み合わせとして理解するが、繰り返し触れることで記憶に痕跡が刻まれていき、次第に「あたたかみ」全体をひとつのまとまりとして操作可能になる。この過程が定着であり、定着した構造がユニットと呼ばれる。音韻構造と意味構造の両面からなるユニットは特に記号ユニットと呼ばれる (本発表では単に記号とも)。語彙-文法連続体を構成する語彙項目や構文スキーマはすべて記号ユニットである。

ない。ただし、標準的な言語使用では提示される記号とカテゴリー化ユニットの関係は比較的単純なものであるのに対し、臨時的伝染の例では提示記号とは別の記号を利用しなければならない点で、この過程がやや複雑化している。

「ぶどう」でぶどうを表すなどの標準的な場合には、提示される記号とカテゴリー化する記号は一致している。また、「あたたかみ」のように構文スキーマを利用した表現の場合には、提示記号とカテゴリー化記号の間には、前者が後者の具体例であるという具体化の関係がある。これに対し、「清水」の例は、当の使用事象に既存の記号との食い違いがあるという点で、新規な比喩の場合に類似している。新規な比喩の場合には、利用する記号は既存のものであり、その記号の意味面において不一致が生じている。たとえば「あの人はシャチだよ」と比喩的に言った場合には〔シャチ〕という記号の慣習的意味とその発話での意味に不一致があるのであって、あくまで既存の記号〔シャチ〕が利用される。それゆえに意味の拡張が生じる。一方、「清水」など本発表で扱ってきた例では、提示された記号とは別の記号を利用しなければならない。つまり、利用する記号の選択のレベルで不一致がある。

表2 カテゴリー化関係による整理

	提示される記号	カテゴリー化ユニット	カテゴリー化関係
	「ぶどう」	〔ぶどう〕	一致
	「あたたかみ」	〔A -み〕	具体化
比喩	「シャチ」	〔シャチ〕	意味の不一致
伝染	「清水」	〔清水の舞台から飛び降りる〕	記号の不一致

ここには以下のようなプロセスがあるだろう。「清水購入した」という発話の「清水」部分に対して、まず清水寺を意味する記号〔清水〕を当てはめてみるが、発話全体の意味と整合しない。そこで〔清水〕を構成要素として含む記号〔清水の舞台から飛び降りる〕を当てはめてみると、形式は一致しないが意味的には整合するため、これを利用して「清水」が〔清水の舞台…〕の意味を持つものとした上で発話全体の意味を理解する。〔清水の舞台から飛び降りる〕という明示されていない記号にアクセスすることが可能なのは、コンテキストから発話意図を推論する能力に加えて、〔清水〕とその他の記号を組み合わせた記号ユニットとしてのイディオムが記憶に定着しているために〔清水〕の活性化に伴って〔清水の舞台…〕も活性化されることによると思われる。これは、発話のインプットに反応して、直接的に関連する記号からわずかな関連性しか持たない記号まで、多数のユニットが「見境なく」活性化されるという見方に合致するものである (Jackendoff and Audring 2020: 203)。

このように、標準的な言語使用と本発表で扱った臨時的伝染現象を、使用基盤モデルの立場ではカテゴリー化の観点から統一的に理解することができる。両者はカテゴリー化ユニットとしての記号の利用の仕方が異なるのである。標準から外れた例の考察によって、普段意識されないが常に生じている発話のカテゴリー化過程の性質が明らかになる。

7. まとめ

本発表では以下のことを主張した。

- ① 「清水」という語で「思い切った決断」を意味するような言語使用は、手がかりとして記号を提示することによって解釈上の鍵となる別の記号を喚起する伝達行為である。
- ② 成立条件として (i) 鍵となる記号の慣習性、(ii) 記号間の結びつき、(iii) コンテキストがある。
- ③ 「意味の伝染」というメタファーは伝達行為としての側面を捉えられていない。
- ④ イディオムの創造的改変や特定のモデル語に基づく語形成も上記のプロセスで捉えられる。
- ⑤ 提示記号によりカテゴリー化ユニットを喚起するという点では、標準的な言語使用も上記の現象と同様である。

参考文献

- Barlow, Michael (2000) Usage, blends, and grammar. Barlow and Kemmer (eds.), *Usage-based Models of Language*, 315–345. Stanford: CSLI Publications.
- Bauer Laurie, Lieber Rochelle, Plag Ingo (2013) *The Oxford Reference Guide to English Morphology*. New York: Oxford University Press.
- Booij, Geert (2010) *Construction Morphology*. New York: Oxford University Press.
- Bréal, Michel (1897) *Essai de Sémantique : Science des Significations*. Paris: Hachette.
- Callies, Marcus (2016) Of soundscapes, talkathons and shopaholics: On the status of a new type of formative in English (and beyond). *Language Typology and Universals*, 459–516.
- 萩澤大輝 (2019) 「Typo に基づく語形成の考察」 『東京大学言語学論集』 41: 31–50.
- 池上嘉彦 (1978) 『意味の世界』 NHK 出版.
- Jackendoff, Ray and Jenny Audring (2020) *The Texture of the Lexicon: Relational Morphology and the Parallel Architecture*. New York: Oxford University Press.
- Kemmer, Suzanne (2003) Schemas and lexical blends. Hubert Cuyckens, Thomas Berg, René Dirven, and Klaus-Uwe Panther (eds.) *Motivation in Language*, 69–97. Amsterdam: Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-based Models of Language*, 1–63. Stanford: CSLI Publications. [坪井栄治郎 (訳) 「動的使用依拠モデル」 坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』 61–143, ひつじ書房.]
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus*. New York: Oxford University Press. [西村義樹他 (編訳) 『メンタル・コーパス—母語話者の頭の中には何があるのか』 くろしお出版.]
- 野中大輔・萩澤大輝 (2019) 「語形成への認知言語学的アプローチ: under-V の成立しづらさと under-V-ed の成立しやすさ」 岸本秀樹 (編) 『レキシコンの現代理論とその応用』 127–152. 東京: くろしお出版.
- 鈴木あすみ (2018) 「日本語における慣用句の逸脱使用がもつ言語機能: 形容詞の反義語への置き換えを手がかりに」 『言語資源活用ワークショップ発表論文集』 3: 105–111.
- 氏家啓吾 (2019) 「語彙項目と構文の相互作用: 認知文法における skewing の批判的検討を通して」 『東京大学言語学論集』 41: 315–328.
- Ullman, Stephen (1959) *The Principles of Semantics*. Oxford: Blackwell. [池上嘉彦 (訳) 『意味論』 東京: 紀伊國屋書店.]